

## いかにトルコのタブーは(国民の)未成熟を永続させているか

サバンチ大学のAyşe Kadıoğlu教授はトルコで育った経験から、多くが法律によって強制されたタブーが国民を「未成熟な状態」の罫におとしめていると語ります。



タブーの魔力の下での成長は、弱まり細った体験のようなものです。止めることの出来ない身体の発達にも拘らず、タブーの魔力は精神を幼稚な状態のままに閉じ込めておくことが出来るのです。“Life of Reason or the Phases of Human Progress”の著者スペイン系アメリカ人の哲学者ジョージ・サンタヤーナはこう言っています。「進歩は変化のなかにはなく、保持に依存している。変化が絶対的なものであれば、そこに向上の余地もなく、可能な改善の方向も定められない。そして、経験が保たれなければ、人は永遠に未熟であり、野蛮であり続ける。過去を記憶出来ない者は、過去を繰り返すしかない。」これらの言葉の重要性を理解した時、私は既に成人しアメリカの大学院に在籍していました。

私は「国家と国民の不可分性（現在のトルコ憲法で何度も引用されている表現）」を脅かさないよう、未だに特定の歴史上の事実を隠す教育制度の普及しているトルコの小学校と中学校のカリキュラムのもとで成長しました。恐らくは国家と国民の連帯への脅威に対する恐怖心が、「恐れるな！」で始まる国歌の歌詞を上手く象徴しているのです。恐怖心がタブーを育ててそれが継続すると、経験し続ける力が衰えていきます。事実と反する歴史的事実、もしくは不気味な沈黙に溢れた教育が続くと人は自らを未成熟なままに押し込めて居る状態から脱け出られなくなります

。

私がボストンで会ったアルメニア系アメリカ人達が私を血相からトルコ人と認識した時、はじめ彼らの束縛されない好奇心が理解出来ませんでした。私達が会話するようになってすぐに私はオスマン帝国崩壊の間に起こったアルメニア人の悲劇について読み始めました。そして私は殆ど他の惑星から来たかのように感じたのです！私は国家主義者のタブーの魔力の下で成長し、特定の事実については無知であるように教育されていました。そう、進歩は経験によって得た知識が保たれていないと表面的な変化にしかならないのです。

トルコには主として「国家と国民と不可分性」の擁護に関する多くのタブーが存在します。これらのタブーを犯すことを罪とした法律も数多くあります。タブーが法律によって認められた時、国民の心は（多くの場合身体も）拘束されてしまいます。一つとしてトルコ共和国の創始者であるムスタファ・ケマル・アタチュルクに関するタブーがあります。トルコにはアタチュルクに対する犯罪に関した法律があります。彼の名声に対する侮辱や社会的地位の中傷は罪になります。もう一つはトルコ軍の神聖不可侵性に関するタブーです。これは人々が強制的な兵役を避けることを制する法律の後ろ盾となっています。多くの良心的兵役拒否者や作家がこの法律に基づき刑事告発に直面しました。"Turkishness"（トルコであること）はもう一つのタブーで、"Turkishness"の侮辱に対しての法律があります。アルメニア系トルコ人のジャーナリストであるフランク・ディングは彼が著した意見が"Turkishness"を侮辱しているとして起訴され、彼の告訴に異議を唱える専門家達の地方刑事裁判所への反論にも関わらず有罪とされました。この告発は2007年に彼が暗殺される事件の導火線となりました。

「領土と国民を併せたトルコ国家の不可分性」の概念がトルコ共和国で一番浸透しているタブーです。トルコ政府が団結した国民という幻想を絶え間なく擁護することにより、クルド系市民のアイデンティティの否定に到ってしまいました。彼らは1980年に起きた軍事クーデターの後、クルド語を話すことが禁止されました。1990年代には秘密裏にトルコで何千人ものクルド人が殺されたか「行方不明」になりました。公開の討論と審議のチャンネルを拡げていくこと抜きには、この暗い古傷が癒されるとは思いません。

法律によって強制されたタブーは思考する能力の前にある足枷のようなものです。公開の討論と審議の場を保持することによって、タブーの魔力から解き放たれ、民主主義の意識を高揚することが出来ます。それ故、そうです、「私達は決して討論や認識に対する論争においてタブーを許しません」、なぜなら、私達は未成熟の畏にはまらないよう努力し分別ある人間として能力を最大限に発揮したいのです。

---

出版日：2月 17, 2012